

－編集あとがき－

1999年に霊長類研究所において附属サル類保健飼育管理施設をもとに新たに人類進化モデル研究センターが発足した。サルの飼育・管理などの業務を引き継ぐとともに、教官の増員が認められ研究体制の大幅な拡充がおこなわれた。センターでは研究所の約800頭のサル類の一元飼育とその健康管理をおこなっており、それに係わる業務は相当な量となっている。このため教官と技官以外に多くの非常勤職員を雇用し、総勢で約30名になる職員がこれらの実務にたずさわっている。多くの実務を抱えた状況でも大学本来の使命である教育と研究の推進は当然であり、特に霊長類研究所は後者に力を注ぐ必要がある。旧サル施設の時から将来、特に研究面の推進をどのようにおこなっていくのか議論されてきた。総勢30名と言ってもその多くは給餌、掃除などサル飼育に直接関与する時間雇用の非常勤職員である。常勤職員の限られた陣容で研究を進めていくには、教官はさらに一層の努力を続ける必要があることが確認された。センター発足に伴い教官が6名と倍増したことは、研究面充実の天与の契機としたい。また技官の高度技能化を進めること、研究補助あるいは研究業務を積極的に進めていくことが望まれている。これは技官職について国の定員削減が進んでおり、限られた定員ポストの有効利用のための将来像として議論されてきている。また研究所のリサーチ・リソース・ステーション計画で常勤技官を飼育実務の統括的立場におく構想と一致している。さらに大学院生、研究員など若い人材も育てていくことが必要であることも指摘された。

このような中で松林センター長から30周年記念誌を出したらどうかとの提案がありセンター内で賛同が得られた。私が編集を引き受けることになった。記念誌であるから過去の資料を整理し載せることも重要である。一方で各人が研究について考える丁度よい機会となる考え、特に技官あるいは院生の方々には自分の業務あるいは成果をなるべく論文の形でまとめて見てほしいとの要望を出した。これらのことからこの記念誌は資料集と和文論文集を兼ねたものを目指した。タイトルは“新しいサル像をめざして”とし、センターになっての新たな船出を表すものとした。技官の方は業務が夕方までつまっており、残業や家庭でおこなうことになったので原稿はなかなか集まらなかった。また図表や写真の用意で混乱をきたした。時間がどんどん過ぎていってどうなるかと思ったが徐々に原稿が集まってきた。業務との兼ね合いは大変であったと思われるが、何とか当初考えていた内容に近いものを出してもらえたと思う。技官の方が自らの業務を整理しまとめたことは、技能を磨いていくにも将来構想を考えるにもよい機会であったと信じたい。

教官や院生はもともとこのような論文形式のものを書く機会が多く提出は早かった。センターは前身のサル施設の時から実務が多いところであり、特に獣医教官はサルの治療・剖検などに時間をとられ研究時間が少なかった。そのため獣医技官の採用と技官の高度技能化で教官の研究面の推進が計られてきている。センター設立とともに研究面の充実はセンター内外からも望まれている。本冊子の業績報告でも明らかなように、センター化がおこなわれた1999年から論文数の増加が顕著になっている。これが初期効果に止まらないよう不断の努力を続けていくことが必要である。

(景山 節)